世尊ヲ家卅六人預合卅之形散掾

543
セ
5

大阪市立中央図書館
昭 24. 7. 18
184131

柿本人麿

本乃しぢ乃山乃
しの濁れあさ
ましきかの
ふ道行人乃
なけそ

一右

貴之

むさぼるの志は

ふかき山

乃井さんあるとても

人ゝ和の拾ぬ

為ふ乳

二位

彰姮

春みどりの松を
橋もかく
四つ目

おもうち抜き家
おき門さ
たまえ

二右

伊勢

三輪の山やまいろよ
ゆらもしひ
物ともな
ものとも
思ふ人も
何のこの
おもへか

なりん

三九

中納言家持

海ゆかばみづくかばねのやまゆかば
かへりみはせじのどかにをる
はるのあめ

三右

赤人

和歌のうらなみよせくれば
みちくるしほの
のゝ花をあらそふ
あしたをさきてきそふ
なるさとのうら

四庚

業平朝臣

ふる雨

月やあらぬ

ぬれ衣や

問ふもの

むかしの

四枚

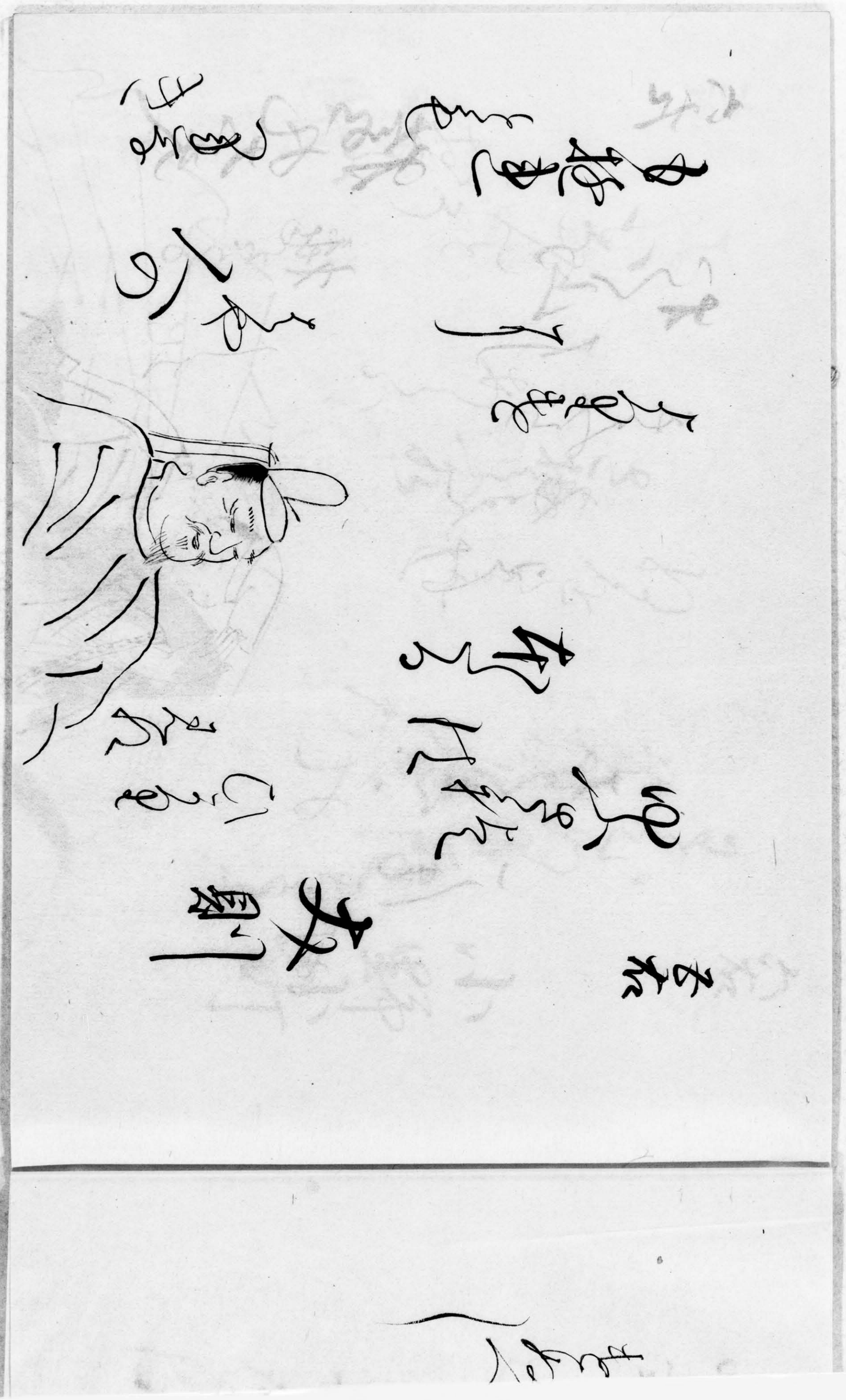
遍照僧正

いせ丸

素性法師

たちとまるかの見
るくさかな

ものは
なるとも
ひ為く
なかめ
ものを
ふる



六左

第八丁

六歌　小野小町

あさぬまて
ねられぬまゝに
かぎりなき
わをこそ
さきにふる
もゝふ
いろんと
おもへ

中納言通俊

みよの春の
ゆきもりまさる
あのはらの
えだのうちつ
かをぬくと
うぐいす

七右

第代の　中納言朝忠

あふことを　いまはかぎりの　いのちもて　たえぬと　思へば　なほ　なげきつるかな

八左

伊勢丹海

中納言教ゑい

ちゝ海乃

ゑ海り

見ゑ

ゝゝも

ゆ見ける

て物ひ

ゑ

あゝへき

八右

高光

ちはやふる
てふ家
の名

其すゑ
家

けうの
おと

梅乃それ

桜よ
のこ
ゝろ

書

九月

雲の色
月見と
なる

公忠朝臣

あけぬ
こゝの
春

うゑ
行き
き

みや
ゐと
ぞ
なる

九右

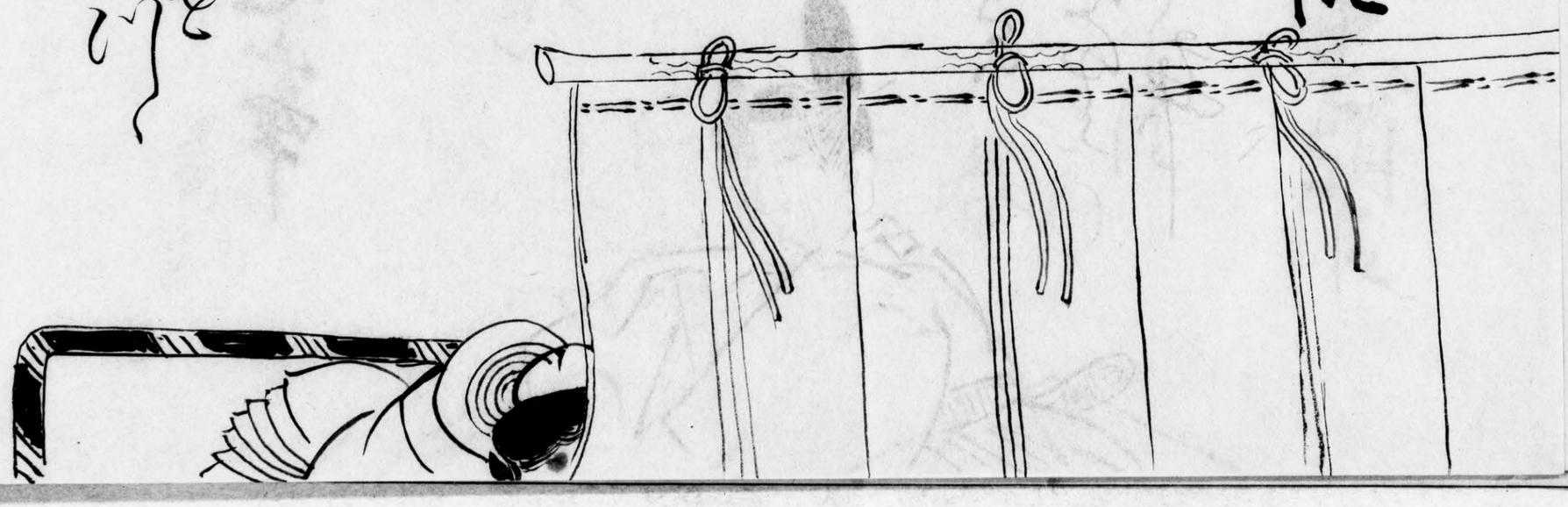
春さめと　忠峯
ふるうり
ちやや

みるうり　春さめ
ひものの　えんの
すまえ　春

十九　東宮安殿

神よりは杜の
ゆふかけ
ちはやぶる
ちり

きさらぎ
あさらの
ゆめを
ひつる



十六

頼基卿

祢のひす
野ごゑこと
まつ殘りたる
清澄こく
の梢ゝ山
ちようひ
そそ
ゝく

十一左

敏行朝臣

梅ちるの
なごりふ
きもとも
さそうるさ
ばかりおの
へのか
ぜかな

いまや
ちらん

十一右

重之

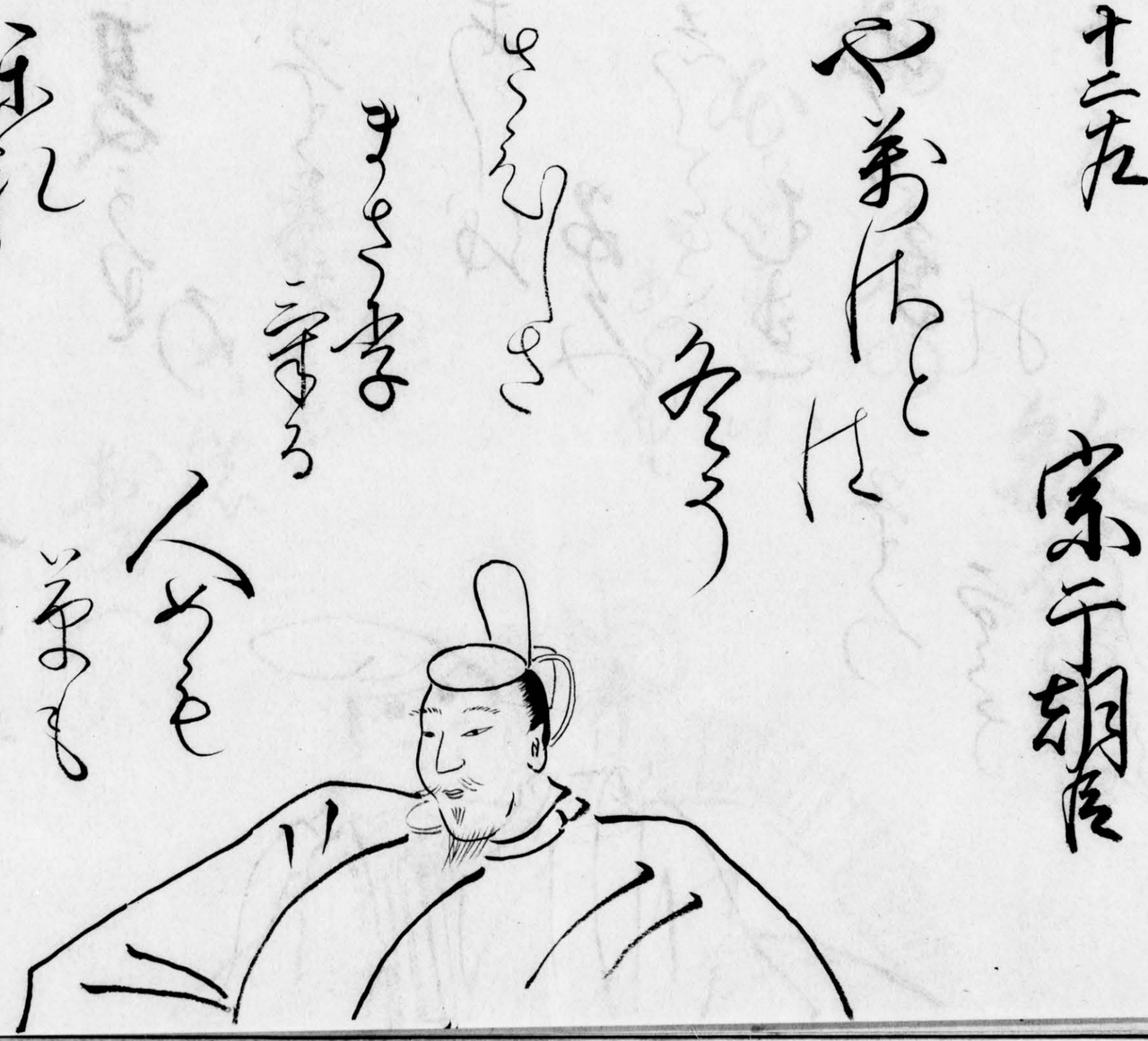
夏の夜の

あはれ

十二右

十二左

宋千胡麻



十二月

子葉

信明朝臣

ぶらりと

有明

月のつき

十二右

順

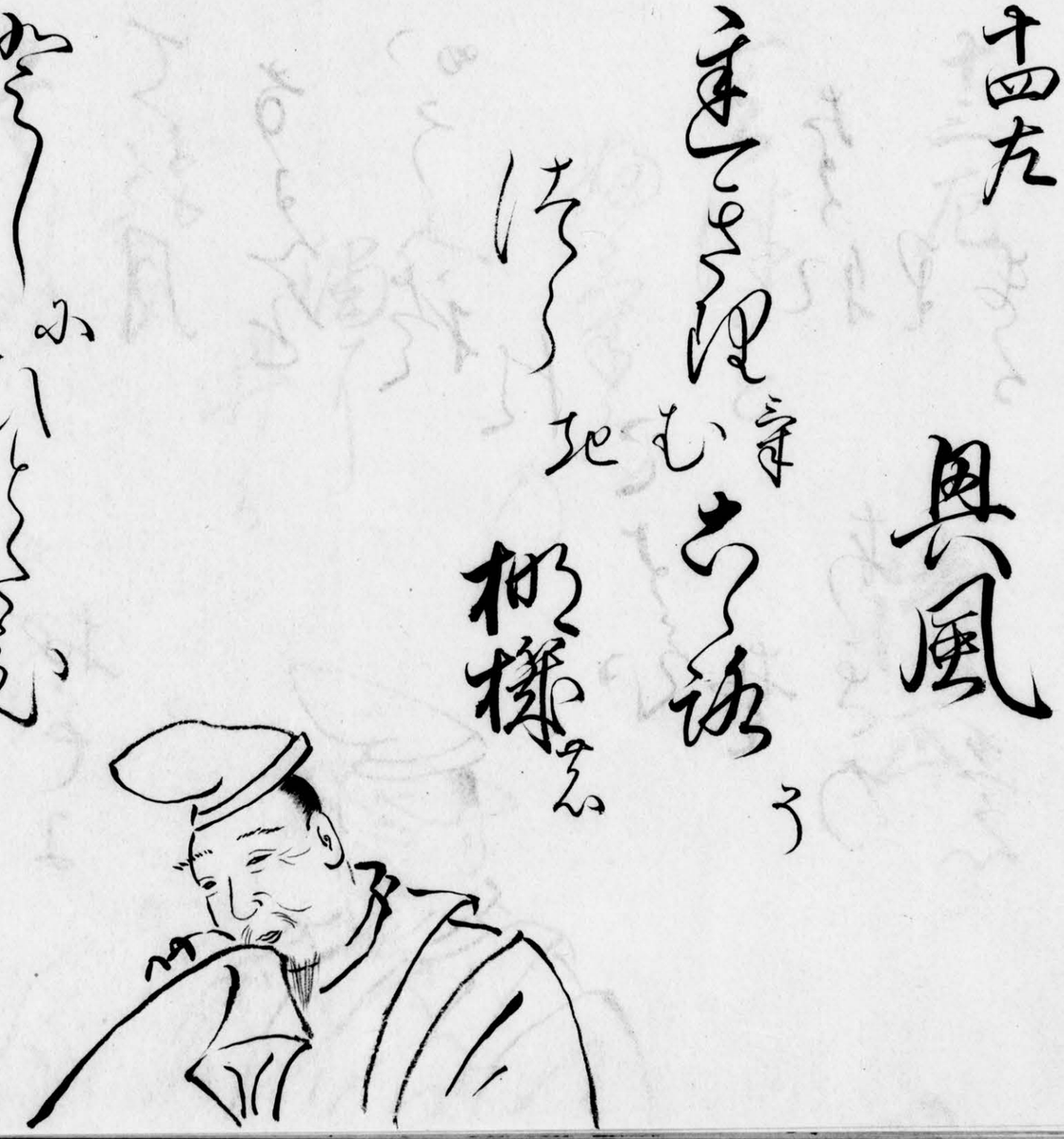
み物の
おもし

て新月
すまんを
つゝ祝
ひ

こゝろむ
ぬを
あきの
さん

なすれ
里
もる

十四丈



十四右

元輔

はこさらきなのうみふ

てをれば　ふかき

理

すぎのまや

なみ　さ

十五丈

十五右

元吉

十六左

小大君

たぼるかのそ面

やもとゝ殆の

さむまれ小

ゆ川とゝみを

ゆもとそ

まろ

十六夜

仲文

おもふ人
みるとはなしに
なかめつる
わがとしつきの
ながめ哉

十七丈

能宣彩良

みのもとも
清しのたく
火の

ゝ数いもを
ゝ
ゝ
ゝ

十七番

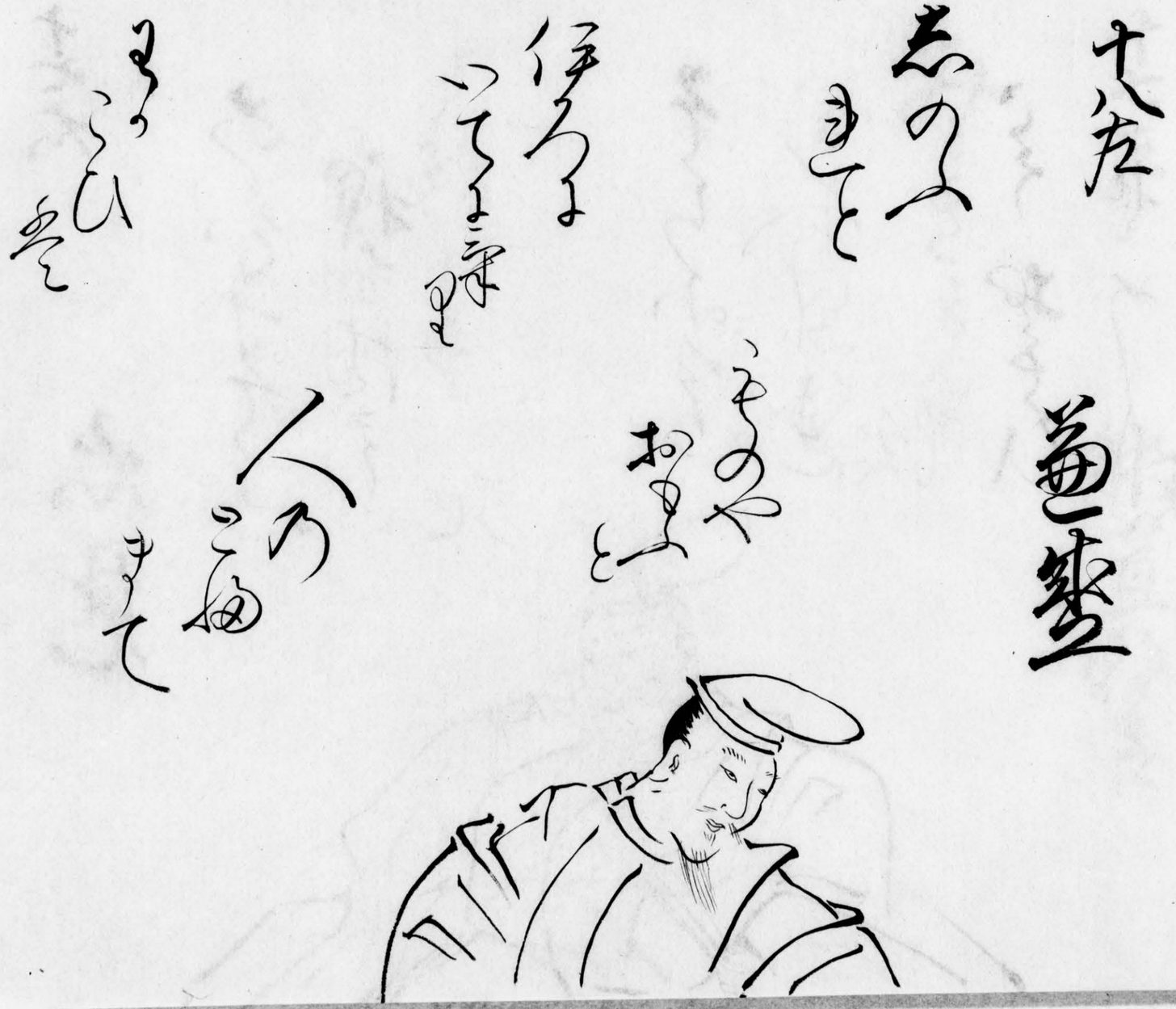
忠見

こゝろをしてしのぶるこいは
我のみぞ
知

さとられぬ
人しれぬ
恋

こゝろ
なきに
なぜ
恋

十九



十八右
萩の葉

中務

あきかぜの
ふくよりつゆの
たまちる
はぎ
て
ゆか
こぼれぬ
ものを

這三十六人歌合は建保年中
順徳院圖繪せしめ給ふ潤色を生ずる
信實朝臣に仰せられ拾ひ和歌
ち彩紙に讃を書しめ給ひ
て諸社の寶殿に掲しめ給ふ
中にも龍田の神の御殿に
筆のとゝらせしものしるも
此圖形と當家に伝へ来て
此ものゝ出ることもあるべし
こゝのちゝこゝに讃を書へゝ
きふの伝と有みこゝろなる
てゝ書給ふすまのなしゝ
此名れいく圖画の體のしさ合
彼是習ふ事也

徳治二年卯月廿五日

三位為經卿之

隨宜樂院宮淮三宮公遵大王
の中院御門蓮二皇子享保七
年より降誕まします御て東叡山
たまふ之そ御退山の後御
上京御まし若宮御得度御
戒師のおのの安永五年春
御下向の御後桃園帝より入木
道灌項御伝更あるもの鶴
廣橋儀同より被乞ものれ
しかるも思食まそあるの御
中より川を天明元年五月なる鶴
川能前中年まして仕下され
よく世古系 厚して辻隠岐守
御ゝ上ゝ之母御産の
間へ左もれ御児まして御退出
を拝仕る日入木道御皆伝あそ

つゝしまるゝもの也
筆者額法師
上座てゝの所云ふ宮よりて
て拝よあゝゝゝれて妻神言之
奉ゝ後神子の新仙の形ゝ彩の
辨をて持上もて対利歌しゝ
引ゝ来ゝ所日光山の新仙の
書辨同画像ハうゝ同ゝ世抱ゝ
同九月八日尹祥をゝ拾ひ作曰
此先ゝ来る歌ゝゝゝゝゝ悲書法
かゝゝ来見ゝて和讃ゝ後水尾
帝宸筆画ゝ春住ゝ作ら
ゝ尹祥拝ゝんゝゝよ此者の形
ゝ来ゝ乃歌ゝ言之ゝ又 禁裏
親王乃抱ゝ物のゝゝ言上ゝ
別新仙作ゝ乃一巻ゝ奉同年

鶴岡八幡宮上宮御修造あり
御新心の旨にて　五枚れ出し
あり　時宮ゝ又の時ゝ上の宮へ
良忠親王下れる宮ゝ為純親王元
文の時ゝ公宮ん親王を拝ゝ奉るの
出由続して天明ゝ公延親王へて
拝奉也ゝと雖三宮ゝ中
を拝ゝ奉れなゝ出入ら上下
の宮ゝ人丸と拝ゝ皆先聖を
拝ゝ奉り　其御系
殿して拝見ゝ仕奉ら
上下ゝ宮ゝよ此人丸の書籍
出ゝ此ゝ也ゝ拝ゝ奉ら
上ゝ宮ゝ入道（木）
御陽明の上ゝ
ゝ持明院家伝来

不打よ思食とのつをしの上
云也あるものをそのさまこの
傳書ナリ云と書付をうめ

天明五年弥生上旬再写之

源平祥

九州大學圖書印

ﻫ ١٠٠٠٧